

LEADERSHIP CHALLENGE

大隈塾LCレポート vol.10

大隈塾リーダーシップ・チャレンジは2016年1月16日（土）、第10回目の講義を開催いたしました。2015年度最終回となる今回は、ジャーナリストの岸井成格さん、コンサルタントの堀紘一さんにご講義いただきました。

1月16日（土）

13:00～14:30 講義第10回

講師：岸井成格氏（TBS「NEWS23」メインキャスター）

テーマ：時事解説「歴史と暦から読み解く 2016年日本の政治と経済」

14:40～16:10 講義第11回【田原総一郎ファシリテーション授業】

講師：堀紘一氏（ドリームインキュベータ代表取締役会長）

テーマ：仕事で一皮むけた瞬間「たくさんの失敗があって、ビジネスマンとして成功した」

16:20～17:00 修了式

17:00～19:00 修了パーティ

ちょうど当日の朝刊に岸井さんが「NEWS23」を降板する記事が掲載。「新聞記者のイロハのイは『新聞記事にならないこと』なのに」と苦笑。もちろんこれは悪事を働かないように、という戒めですが、辞任発表後の第一声が大隈塾となりました。また堀紘一さんは、前回と同じピンクのシャツにピンクのカーディガン。中はセーターでも外はスーツの田原総一郎に「ラフな格好して来い、って言ったじゃないですか」と苦情。田原は「いや、ぼくはスーツ以外着るものを持ってないんだ」と苦悶。ご自身の記者会見を控えてばっちりスーツ姿の岸井さんも、そのやりとりを笑って、和やかな控室となりました。

【講義第10回】

講師：岸井成格氏

テーマ：「歴史と暦から読み解く 2016年日本の政治と経済」

・諸任地は熊本。水俣病やサリドマイドなど公害病の取材を一生懸命やった。あるサリドマイド病患者の女の子がいた。とても聡明だが手が短い。だけど手でできることはすべて足でできる。泳ぐこともできる。この子を普通の小学校に入れるように、各社記者たちが一致協力して根回し

をした。無事小学校に行けた。彼女のことは『典子は今』という映画になった。

・佐藤内閣での「公害国会」（1970年）、熊本、新潟、四日市、川崎から記者が集められた。公害対策の役所が作られる予定になったが、それを「環境庁」と名付けた1人となった。

・申年は大転換の年になる。環境についてはCOP21にすべての国家と地域が合意をつけた。ローマ法王が「環境破壊が最大の脅威」と公式に言及したことも影響しのかも知れない。異例の発言だった。

・脅威といえば、北朝鮮についてオバマ大統領は最後の一般教書演説で「アメリカ合衆国に対する直接の脅威」と述べた。核実験のことを指す。水爆であるかどうかは別にして、北朝鮮が大きく揺れていることは確かだ。

・北朝鮮の準中距離ミサイル「ノドン」は日本に射程を合わせている。原発を含む発電所、米軍基地、自衛隊基地などが標的だ。日本にとって直接の脅威だが、どれくらいの日本人が危機感を持っているか。

・安保法制はきちんと法文を読めばわかる。日本を守るため、抑止力を高めるためというよりアメリカの下請けになるためだ。アーミテージ氏などインタビューしても、そういつていた。ISなどとの戦いで、米兵の代わりに日本の自衛隊員を送り込むことになる。

・「武器」とはいわなくなった。「防衛装備」と表現する。「平和安全」といい「防衛装備」といい、こうした言い換えやごまかしは気が付きにくく、問題から目をそらさせる。

・メディアも政治家も劣化している。

・企業は清く正しく利益の追求はできないだろう、社員を養うことはできないだろう、税金を収めて世の中の役に立つこともできないだろう。企業だけではなく働いている個人もそうだろう。しかし私たちは、「豊かさ」とは何かということを考えなおす必要があるのではないか。ウルグアイのホセ・ムヒカ前大統領は「貧乏な人とは、ものを少ししか持っていない人ではない。無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことだ」といった。

【受講生のレポートより】

岸井さんの話を聞いていると、この先の世界、日本は課題山積であることがよくわかった。我々は企業の立場から世界、日本の課題解決にどのように貢献していけるのか。目の前の問題ばかりに気を取られがちだが、世界や日本の動きにも関心をもって、会社として社会の中で何を成し遂げていくべきなのか、といったことも考えていかねばならないと感じた。



=====
新聞やテレビ等の報道を通じて、間接的に触れている世界情勢に関し、とても近い立場で接しているジャーナリストの方から話を伺ったことで、臨場感をもって捉えることができた。特に、年明け以降は地政学的リスクの高まりやそれによる金融マーケットの乱れが起こっているが、これらが「人類生存の危機」への兆候だとするなら、それを回避するために自分は何ができるのか、これまで以上に危機感を以て考えていきたい。

=====
政治・マスコミの世界は、縁遠く・世界が違うと改めて感じたが、少し興味関心を持ち、必要最低限の知識は身に着けるべきと思った。岸井氏の話を通じて、一事象についての自分自身の意見が非常に強固だと感じた。それは、（今は自身ではしないかもしれないが）取材し、入手した情報を、咀嚼し、自分なりに捉え、言葉にしているからだと思うが、人が伝える以上、“中立的な報道”は出来ないと思った。田原氏が新聞を全紙読まないと、本当のことは何か分からないとおっしゃっていたことが、その通りだと思った。

=====
講義の中では岸井氏から我々が今後直面する様々な危機・チャレンジについて説明があった。その中で社会に生きる一人として自分のスタンス・座標軸をしっかりと持つことが求められるということには非常に納得できた。今までの講師の方々も違う言葉ではあるが、言っていたことのように思える。

【講義第11回】田原総一郎ファシリテーション講義

講師：堀紘一氏

テーマ：「たくさんの失敗があって、ビジネスマンとして成功した」

・今年71歳になるが、夢の実現を感じ始めた。シリコンバレーの産業クラスターにドリームインキュベータが招待されたからだ。

・日本の企業は「意思決定が遅い」「投資額が少ない」「常に説明を求める」「情報提供が一方的」という評価がシリコンバレーのみならず先進諸国では共有されている。そこに一石を投じることができたという意味でも、夢の実現といえる。

・ジャパン・アズ・ナンバーワンの日本が、どうしてここまでアメリカと差がついたのか。それはオリジナリティの欠如にあるだろう。たとえばUberなどは、日本では「白タク」として規制の対象になりこそすれ、それがイノベーションとはとうてい認められないだろう。



・とはいえ、日本も捨てたものでもない。企業はダメでも人は優れている。我が社においても一番の資産は社員だと思っている。

・最大の資産である人を育てる。時間がかかる、急成長はしない。好奇心があり、観察力があり、発明発見のために微妙な違いを見分ける目利きであるようになるには、そうとう時間とカネを投資しないとイケない。

・育てられる本人も、自覚して自ら学ぶことが必要だ。たとえば、価値観が違う人とどれだけ接するか、意見交換するか。表面がツルツとした人よりもザラツとして人と付き合うべきだ。

【受講生のレポートより】

講義の終了間際におっしゃっていた、自分とは異なる価値観を持った人と接触すること、は非常に重要であり今後も自分としてやっていくことと感じた。ひとつの会社に、またその中でも会社の外に出ない場合、どうしても社内の似た価値観に染まってしまう傾向があるように思う。その中で通常とは異なる価値観を持つ人と接触し、異なる体験・考えを吸収するのは仕事・プライベートあらゆる面でプラスに働くであろうと感じる。

=====
日本企業の特徴である、(1)意思決定が遅い、(2)出資額が少ない、(3)常に説明を求める（カネは少ないが、口は出す）、(4)情報提供が一方通行になる、は自社に非常に当てはまると思った。(1)(2)(3)については、リスクマネジメントの観点からは一概に悪いとは言い切れないが、(4)については、改善していきたい。自分の立場でも、情報交換、という名目で、他社に話を聞きに行ったり、子会社に訪問したりするが、相手から情報を提供されるだけでは無く、自分から提供できることは無いのか、相手に時間を割いてもらっているとの意識を常に持ち、お互い価値のある時間にするよう心掛けたい。

=====
日本・日本人の課題がオリジナリティの欠如であるという指摘、そして、クリエイティブを発揮するためには先人の作り上げた知識を習得することが肝要であるということは、これからのビジネスにおいて肝に銘じていきたい。

=====
文系が技術屋をうまくコントロールすることが必要という話は、最近近し上司との間でよく出る話であり、大変興味深かった。堀さんからも言われたが、当社もトップクラスの技術力を持つものの、うまく文系がそれをコントロールできていないように感じる。傍から見てみると技術屋

が自分たちの自己満足のために技術開発を行っていて、それがうまく会社の施策とリンクしていないように感じる。もっと技術をうまく使えば、もっと良いサービス、より効率的な業務遂行が実現すると思う。この点は自分が今後仕事をするうえでもよく考えていきたいと思った。

【修了式、修了パーティ】

講義後すぐに修了証書授与式を行いました。お一人ずつお名前を読み上げ、田原総一郎が修了証書をお渡しし、堀紘一さんが修了記念品（江戸切子のペアグラス）を差し上げました。



【修了生のstory of us より】（story of us とは、第4回大隈塾LCの「パブリック・ナラティブ」で学んだコミュニケーション、オーガナイズの技法です。プロジェクトの価値観、重要性、意志や志をメンバーが共有している、ということを確認できるように事例を上げながら語ります）

私たちは日本の経済、社会を様々な立場で支えている主要企業から派遣されてこの塾に参加することを選択した。会社では上司と部下に挟まれた立場で課題を与えられもがきながら、休日くらいゆっくり家族と過ごしたいという思いを持ちながら、この塾に参加した。ただ、幸い私たちはこの大隈塾で様々な貴重な人たちと出会うことができ、これまでの9か月で非常に多くのことを学び、共有した。

歴史的な視点、広く俯瞰する視点から私たちが今生きている世界、時代を見つめ、世界、日本が今抱えている課題は何なのかを学んだ。田植えや稲刈りを通して、日本古来の自然を感じ、日本の環境がいかに素晴らしいものであるか、日本の良さを学んだ。企業で働き家庭を持つ者として、自分はどのような人間であるべきか、どのような知識やスキルを身につけ、どのようにリーダーシップを発揮すべきか、どのように社会に貢献してすべきかを考えた。そして、リーダーとして力を発揮するためには体を十分に整えていくことも大切だということも学んだ。

こうしたプログラムを通して、私たちの中には「社業を通じて社会に貢献する」という価値観が醸成されつつあるように感じる。また、私自身、この9か月で少しずつ自分が変わってきたような気がしている。本を読むことの重要性を身にしみて感じて本を積極的に読むようになり、関心の幅が広がったように感じる。また、様々なリーダーや言葉に出会うことができ自分がどうあるべきかをより真剣に、深く考える機会が増え、少しずつ自分の中で考え方の軸が明確になってきたように感じる。更に、自宅でコンディショニングを継続するうちに少しずつ体温が上がり、調子が良くなってきているように感じる。実践を継続すれば成長していけることを実感している。

大隈塾で学び、そして、お互いに共有したものを、それぞれが会社に持ち帰り、リーダーシップを発揮し、「社業を通じて社会に貢献」していけば、今後も日本は衰退することなく発展していくだろう。「今後の日本を支えるのは私たちだ」という意識を持ち、会社と自分のありたい姿を描き、お互いに切磋琢磨しながらその実現に向けて着実にアクションを起こしていこう。そして明るい日本の未来を創っていこう。

大隈塾リーダーシップ・チャレンジレポート vol.10

2016年1月31日発行（通算21号）

大隈塾事務局（一般社団法人ストーンスープ）

村田信之 mura@ta2.so-net.ne.jp

169-0051 東京都新宿区西早稲田1-9-19 アーバンヒルズ早稲田207

tel:050-3558-7527 mail:ookuma_school@stonesoup.tokyo

（このレポートのすべての文章に対する責任は大隈塾事務局にあります）